

# 国土技術政策総合研究所資料

TECHNICAL NOTE of  
National Institute for Land and Infrastructure Management

No. 276

December 2005

国土交通省国土技術政策総合研究所

緑化生態研究室報告書 第 20 集

緑化生態研究室

Landscape and Ecology Division, Annual Research Report (20th)

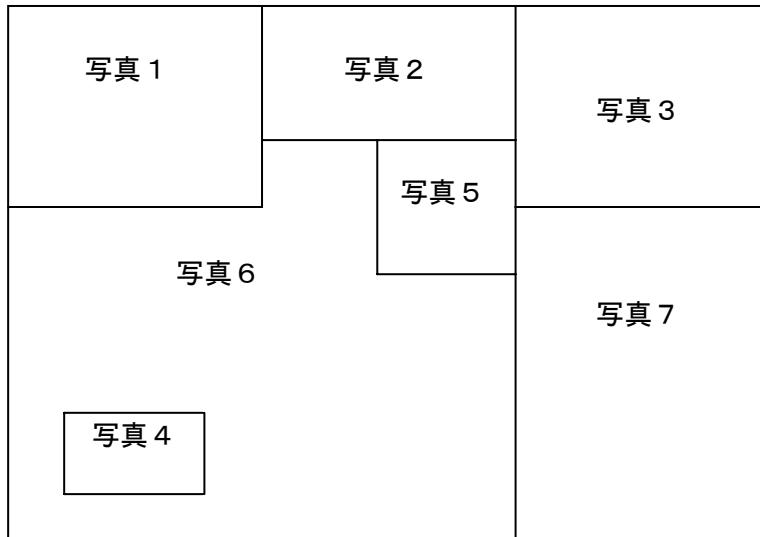
Landscape and Ecology Division



国土交通省 国土技術政策総合研究所

National Institute for Land and Infrastructure Management  
Ministry of Land, Infrastructure and Transport, Japan

表紙の写真：カメラトラップ（赤外線センサ付自動撮影）による野生動物の生態写真



- 写真1. 走るニホンアナグマ (*Meles meles*)
- 写真2. ドングリを銜え地上を駆けるニホンリス (*Sciurus lis*)
- 写真3. 何かを狩るフクロウ (*Strix uralensis*)
- 写真4. ナメクジを食べようとするアカネズミ (*Apodemus speciosus*)
- 写真5. ジャンプで着地したニホンノウサギ (*Lepus brachyurus*)
- 写真6. 跳躍中のニホンテン (*Martes melampus*)
- 写真7. フラッシュが眩しい(?) ニホンイノシシ (*Sus scrofa*)

カメラトラップは、捕獲などにおける動物へのストレスや多大な労力を掛けずに生息等を確認できる方法として、近年多く用いられるようになりました。利点としては、生息の時間と場所が特定できること、行動（捕採食・移動・複数個体での行動など）を判別できることなどのほか、皮膚病の確認や個体識別が可能な場合もあります。生息していないという確証が得られないことや、気温などの環境によるバイアス、種や個体によるバイアス（写り難い種や個体があるなど）が欠点としてあげられますが、サンプリングデザインや統計処理等で対応していけば、定量的に生息分布や個体群動態を把握する定点観察手法として有効です。